

韓国語光陽市津上面方言のアクセント*

孫 在 賢**

The objective of this paper is to describe the accent systems and their mechanisms of a dialect in the Gyeongsang province of Korea. I will discuss on the three-class type in this paper found in this areas, and report on data obtained during field work there.

The three-class system proposed in this paper can be found in Gyeongsang-do, Jella-do, Chungcheng-do, and the following neighboring regions surveyed by the present writer: Sangju-si, Gumi-si, Gimcheon-si, Geochang-gun and Hamyang-gun, with the Sobeck mountain range at the center. I have previously discussed the accents of this area. In this paper, I will take Gwangyang dialect, and discuss phenomena, such as the accents of compound words, which have not yet considered.

Key words : accent, Gwangyang Dialect of Korean, Three-pattern accent system, N-pattern accent system
(アクセント、光陽市方言、三型アクセント体系、N型アクセント体系)

1. はじめに

韓国のアクセントの研究は、勿論韓国の国語研究者によっても行われているが、そちらでは中国語の声調(tone)に似る音調単位の音の高低の変化とみる考え方が支配的である。これに対し、本研究は今までの日本語の諸方言で観察されている、単語単位の音の高低の変化のパターンに基づいて、韓国語の方言のアクセントを記述したものである。

* This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government (NRF-2010-327-A00226)

** 徳成女子大学校日語日文学科・助教授

2. 研究概要

本稿では、韓国全羅南道東南部に位置する光陽(Gwangyang)のアクセントについての報告である。この方言は、慶尚道方言式三型アクセント地域と全羅道方言式三型アクセント地域として分けられるが、慶尚道方言で観察される三型アクセント体系を有する方言のなかでも、接続形と言い切り形の区別のある方言が存在していること、また接続形と言い切り形の区別を有する方言では、下降の遅れが起こったことがわかった。

「接続形と言い切り形の区別」と「下降の遅れ」は、とくに江原道方言のN型アクセントにおいてよく観察される現象でもあり、韓国語のN型アクセントの成立過程をたどることにあたり、非常に重要だと考えられる。

本稿では、先行研究との相違を検討しつつ、この論文で扱われていない点を中心に論じる。以下の三つのテーマを中心に扱う。

- (1) アクセント体系、
- (2) 言い切り形と接続形の区別、
- (3) 複合名詞のアクセント。

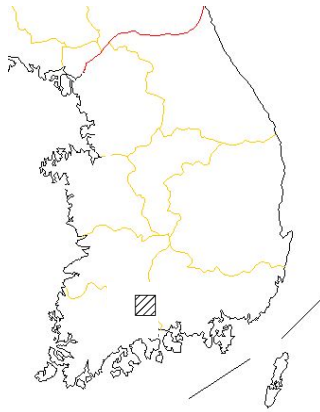


図 1. 図が研究対象地域

3. 音素および表記

母音音素は/i、u、o、e、ε、ɔ、a/の八母音で語頭において長短の区別をもち、/ε/と/ɔ/の対立が存在する。そのほか、半母音音素/w、j/、子音音素/p、p^h、p'、t、t^h、t'、ʃ、ʃ^h、ʃ'、k、k^h、k'、m、n、ŋ、s、s'、h、r/がある[福井(1998a,b)も参照]。

なお、今回の調査では、同じアクセントの体系を有する慶尚道方言では見られない語頭の/s/と/s'/の対立があることがわかった。

(例) /sar/と/s'ar/「肌」と「米」。

音調表記は簡略音声表記である。高く現われる音節をH、低く現われる音節をLで表記する。Fは下降調を意味する。Fは言い切り形の末尾音節においてのみ現れ、Hの変異形である。簡略表記ではHにまとめることもある。(H)と(L)は助詞を示す音節でそれぞれ高い音節と低い音節を表わす。H:は長母音をもつ音節を、「.」は音節境界を表わす。

4. 先行研究

全羅道光陽市方言にアクセントの対立があることが明らかになったのは、福井玲(1998a)に始まり、福井(1998a)ではこの方言の地理的分布を、福井(1998b)ではこの方言のアクセント体系の詳細を記述している。

김차균・강홍구(2009)は、光陽市津上面方言の音調型と15世紀～16世紀の文献資料で知られるアクセント及び他方言との音調型を比較し、それらの対応関係を中心に論じている。

本研究ではアクセントの体系化を主眼としている福井(1998a,b)に焦点を当てて考察することとする。福井の論文に提示された津上面(青巖里：話者は1926年生まれ)方言の音調型をまとめて、表1に示す。

〈表 1〉津上面のアクセント体系、福井(1998b:77)

A	H(H)	HH	HHLL	HHLL	HHLLL
A'			HHH	HHHL	HHHLL
A''				HHHH	HHHHL
B	R:	R:L	R:LL	R:LLL	R:LLLL
C	H(L)	HL	HLL	HLLL	HLLLL
D		LH	LHL	LLHL	LLLLHL

表1のA'とA''系列は 高い音節が語頭から連続して三つ以上現われる音調型で、(1)A系列の発音にゆれが見られる場合と複合語の場合で、アクセント上二単位に分かれるとされている。結論からいうと、筆者もこれらの音調型を二単位形として扱う。これについては、孫在賢(2010)でこれらの音調型の生産の仕組みを考察したうえ、「アクセント的に一つのまとまりをなしていない不完全な複合語」と「単独形の高い音節が単に並んだだけのもの」に分け、アクセント体系に取り込まない理由を述べた。

表1のB系列は、R:, R:M, R:ML, R:MLL, R:MLLLのようにも発音されたりするもので福井玲(1998a)、ここでの表記は音声的な表記にすぎないが、表1では長母音を音素として立て、アクセントの違いの反映とみているため、この体系はA・B・C・Dの四つの系列からなる四型アクセントになっている。

5. アクセント体系

アクセント体系(求礼郡良田面方言も含む)は、現在までの筆者の調査では、慶尚道と全羅道の忠清道との境界地域の五地点〔尚州市、亀尾市、金泉市、居昌郡、咸陽郡〕に見られる方言と同様で、アクセント単位が長くなっても、三種類のアクセント対立しかない。それぞれ

を①型、①型、-②型と呼ぶ(表1)。σは任意の音節で、]の記号は下げ核を表す。]]の記号は、アクセント核の位置が後ろから二番目に固定していることを意味する。

〈表 2〉 光陽市津上面方言のアクセント体系

	1	2	3	4	5
①	σ	σσ	σσσ	σσσσ	σσσσσ
①	--	σ]σ	σ]σσ	σ]σσσ	σ]σσσσ
-②	σ]]	σσ]]	σσ]]σ	σσσ]]σ	σσσσ]]σ

〈表 3〉 アクセント体系における語例

	1	2	3	4	5
①	pɛ 腹	o.ri アヒル	o.mo.ni お母さん	ku.ruum.ta.ri 陸橋	o.ri.pur.ko.ki アヒルのプルコギ
①	--	u.ri 檻	or.p'ɛ.mi 梟	pa.tuk.mu.ni まだら模様	mo.rɛ.ʃu.mo.ni 砂袋
-②	pɛ 梨	u.ri 私達	sa.ta.ri 梯子	ko.ʃʰut.k'a.ru トウガラシ粉	ke.par.k'ɔp.t'e.ki 貝殻

まず、①型「σ、σσ、σσσ、σσσσ、σσσσσ」は、一音節語は下降調(F)で、三音節単位以上では、必ず第一・二音節が高くなり、二音節単位以下では末尾音節は下降調で現われる。

語頭に長音をもつ単語(以下、長母音音節語)は、一音節語単独では 軽い上昇調で現われるが、二音節語以上では高平調で現われる。音調型の点で①型のHF、HHL、HHLL、…の音調と類似しており、その違いは母音の長短の差に帰せられると考えて①型にまとめる。

①型は、第一音節のみが高く現われるが、一音節語の場合は、単独接続の環境においてのみ低く現れ、HとLの交替形をもつ。単独言い切りでは⑩型との区別がないが、助詞付き形ではH(L)となって⑩型のH(F)と区別される。つまり、一音節語の場合、表層では中和している。

①型は、二音節語までは安定しているが、三音節語以上になると⑩型で現れることが多い。すなわち、この方言では、三音節語以上になる①型は、⑩型で変わりやすく、このことから、従来の研究でアクセントの対立がないまたは不安定な方言として扱われたと考える。

しかし、〈表 4〉と〈表 5〉のように言い切り形と接続形の音調を分けて調べると、この方言は単なる「不安定な方言」ではなく、①型「o]σ、o]σσ、o]σσσ、o]σσσσ」が無くなっていく過程にある方言であることがわかる。つまり、このような過程を経て①型が⑩型に合流することが予測できる。

〈表3〉のアクセント体系における語例の①型のpa.tuk.mu.ni(まだら模様)、mo.re.ʃu.mo.ni(砂袋)のように①型で実現される例もあるが、多型の多くの①型の単語がすでに⑩型に実現される。

-②型「o]], σσ]], σσ]]σ、σσσ]]σ、σσσσ]]σ」は、二音節語以外は、助詞がつくと高い音節が一音節後ろに 延びる。すなわち、低く始まり第二音節から次末音節まで高く現れ、アクセント核は後ろから数えて二番目の音節にある。この型は、アクセント核の位置が文節単位で固定されている点で、アクセント核が名詞に固定している他の型と区別される。

なお、表3を含め、すべての表の中の記号は音韻記号で、／／の記号は省略する。

6. 言い切り形と接続形の区別

今回の調査で、先行研究では言及されていない言い切り形と接続形の違いがあることがわかった。その違いは主に①型で現われる(一音節語の-②型における言い切り形と接続形の違いは、すべての慶尚道

方言で現れている現象で、すでに指摘した)。表4と表5は津上面蟾居里方言において実現される音調で、①型において下降の遅れが起こったことがわかる。このような現象は、光陽市玉谷面仙柳里方言と、従来全羅道型アクセントをもつとされている求礼郡良田面雲川里方言でも観察された。なお、良田面方言についてこの事実だけ書いておき、今後改めて報告することにする。

〈表 4〉言い切り形の音調型

		語例	単独言い切り	助詞付き言い切り
1	①	kir 道	F	H(F)
	-②	mar 馬	F	H(L)
2	①	na.i 年齢	HF	HH(L)
	①	na.pi 蝶	HL	HH(L)
	-②	mo.ʃa 帽子	LF	LH(L)
3	①	mu.ʃi.ke 虹	HHL	HHL(L)
	①	ka.o.ri 嬰	HLL	HHL(L)
	-②	ka.ʃa.mi 鰈	LHL	LHH(L)
4	①	ʃuŋ.kuk.s'a.ram 中国人	HHLL	HHLLL
	-②	o.ru.mak.k'ir 坂道	LHHL	LHHH(L)
5	①	na.pi.nek.tʰa.i 蝶ネクタイ	HHLLL	HHLLLL
	-②	na.mu.mak.t'e.ki 木の棒	LHHHL	LHHHH(L)

〈表 5〉接続形の音調型

		語例	単独接続	助詞付き接続
1	①	kir 道	H	H(H)
	-②	mar 馬	L	H(L)
2	①	na.i 年齢	HH	HH(L)
	①	na.pi 蝶	HH	HH(L)
	-②	mo.ʃa 帽子	LH	LH(L)
3	①	mu.ʃi.ke 虹	HHL	HHL(L)
	①	ka.o.ri 嬰	HHL	HHL(L)
	-②	ka.ʃa.mi 鰈	LHH	LHH(H)
4	①	ʃuŋ.kuk.s'a.ram 中国人	HHLL	HHLL(L)
	-②	o.ru.mak.k'ir 坂道	LHHH	LHHH(H)
5	①	na.pi.nek.t'a.i 蝶ネクタイ	HHLLL	HHLLL(L)
	-②	na.mu.mak.t'e.ki 木の棒	LHHHH	LHHHH(H)

7. 複合名詞のアクセント

複合名詞アクセントは、孫在賢(2007)などで扱った慶尚道方言の三型アクセントの複合名詞アクセントと同様に捉えられるが、やはり、複合名詞の全体要素においても四音節語以上では、①型は避けられている。この点を除けば、この方言の複合名詞アクセントは、後部要素(Y)のアクセントに関係なく、前部要素(X)のアクセントが全体(Z)のアクセントになる。

ただし、Xが一音節語の①型の場合で、Yが①型であれば、Zは①型で現われるが、それ以外の場合は、Zは-②型になる。「a」は任意の

アクセント型を意味する。

なお、下降の遅れが起こった光陽市津上面蟾居里、光陽市玉谷面仙柳里、求礼郡良田面雲川里では、三音節語以上では①型は避けられるため、表7のNos.21～30のZ(複合語全体)は、すべて第一音節と第二音節のみが高く現れる②型である。

〈表 6〉複合名詞規則における語例(1)

No.	X	Y	Z	語例	
1	○=	○=	○○=	pam.ʈʰam	夜の眠り
2	○=	○○=	○○○=	pap.ʈʰaŋ.sa	食堂
3	○=	○○○=	○○○○=	mjoːn.s'a.mu.so	面の行政機関
4	○=	○]	○○=	pam.ʈʰa	夜行列車
5	○=	○]○	○○○=	pa.mi.sʊr	夜露
6	○=	○○)]	○○○=	tor.ko.rɛ	イルカ
7	○=	○○)]○	○○○○=	kan.ko.tuŋ.ɔ	味付け鯖
8	○=	○○○)]○	○○○○○=	twiː.ʈʰi.nw.rɔ.mi	尻鰭
9	○○=	○=	○○○=	pʰa.ri.ʈʰe	ハエたたき
10	○○=	○○=	○○○○=	juk.ʈʰi.toŋ.mur	陸上動物
11	○○=	○]○	○○○○=	hjoːp.tʰoŋ.s'ɛŋ.har	共同生活
12	○○=	○]○	○○○○=	ʈʰoː.sok.ʈʰa.rjaŋ	低速車両
13	○○=	○]○○	○○○○○=	ʈʰo.kʰa.mjoː.nw.ri	甥の妻
14	○○=	○○=	○○○○=	kuk.min.ʈʰe.ʈʰo	国民体操
15	○○=	○○○=	○○○○○=	jo.ʈʰa.jo.nɛ.in	女性芸能人
16	○○=	○○)]	○○○○=	mɛk.ʈʰu.koŋ.ʈʰaŋ	ビール工場
17	○○=	○○)]○	○○○○○=	su.hak.sɔn.s'ɛŋ.nim	数学の先生
18	○○○=	○=	○○○○=	mu.ʈʰi.kɛ.sɛk	虹色
19	○○○=	○]	○○○○=	pur.ko.ki.ʈʰip	ブルコギ屋
20	○○○=	○]○	○○○○○=	to.ki.rɔ.su.ɔp	ドイツ語の授業

〈表 7〉複合名詞規則における語例(2)

No.	X	Y	Z	語例	
21	〇〕〇	〇=	〇〕〇〇	ku.sur.t'am	玉の汗
22	〇〕〇	〇〇=	〇〕〇〇〇	koŋ.rip.hak.k'jo	公立学校
23	〇〕〇	〇〕	〇〕〇〇	mjaŋ.t ^h e.k'uk	スケトウダラのスープ
24	〇〕〇	〇〕〇	〇〕〇〇〇	na.p ^h ar.so.ri	らっぱの音
25	〇〕〇	〇〕〇	〇〕〇〇〇	pa.tat.so.ri	海の音
26	〇〕〇	〇〇〕〕	〇〕〇〇〇	uŋ.həŋ.na.mu	銀杏
27	〇〕〇	〇〇〕〕〇	〇〕〇〇〇〇	mun.t ^h a.met.se.t ^h i	携帯のテキストメッセージ
28	〇〕〇〇	〇〇=	〇〕〇〇〇〇	nam.tɛ.mun.si.t ^h aŋ	南大門市場(地名)
29	〇〕〇〇	〇〕〇	〇〕〇〇〇〇	sin.sək.k'i.si.tɛ	新石器時代
30	〇〕〇〇	〇〇〕〕	〇〕〇〇〇〇	si.kuŋm.t ^h i.na.muŋ	ほうれん草のナムル

〈表 8〉複合名詞規則における語例(3)

No.	X	Y	Z	語例	
31	〇〇〕〕	〇〇=	〇〇〕〕〇	ko.tuŋ.hak.k'jo	高校
32	〇〇〕〕	〇〕	〇〇〕〕〇	seŋ.kaŋ.t ^h a	生姜茶
33	〇〇〕〕	〇〕〇	〇〇〇〕〕〇	an.t ^h ɔŋ.pɛr.t ^h u	安全ベルト
34	〇〇〕〕	〇〕〇〇	〇〇〇〇〕〕〇	t ^h u.min.tuŋ.rok.t ^h uŋ	住民登録証
35	〇〇〕〕	〇〇〕〕	〇〇〇〕〕〇	ka.wɾ.p'a.ram	秋の風
36	〇〇〕〕	〇〇〕〕〇	〇〇〇〇〕〕〇	koŋ.haŋ.t ^h u.t ^h a.t ^h aŋ	空港の駐車場
37	〇〇〕〕〇	〇〕	〇〇〇〕〕〇	sa.ta.ri.t ^h a	はしごの車
38	〇〇〕〕〇	〇〕	〇〇〇〕〕〇	k ^h oŋ.na.mur.t ^h ip	豆もやし屋
39	〇〇〕〕〇	〇〕〇	〇〇〇〇〕〕〇	to.t ^h a.ki.koŋ.e	陶芸

〈表 8〉複合名詞規則における語例(3)

40	○○〕○	○○ =	○○○○〕○	kaŋ.wɔn.to.sa.ram	江原道の人
41	○○〕○	○〕○	○○○○〕○	nu.tʰa.ri.pɔ.sɔt	平茸
42	○○○○〕○	○ =	○○○○〕○	hɛ.pa.ra.ki.s'i	ヒマワリの種
43	○○○○〕○	○〕	○○○○〕○	a.kʰa.si.a.k'ot	アカシアの花
44	○〕	○ =	○〕○	kum.sir	金糸
45	○〕	○○ =	○〕○○	sɛŋ.mɛk.ʔ'u	生ビール
46	○〕	○〕	○○〕	k'ot.ʔ'ip	花屋
47	○〕	○〕○	○○〕○	tak.k'o.ki	鶏肉
48	○〕	○○〕	○○〕○	pɛ.na.mu	梨の木
49	○〕	○〕○○	○○○○〕○	jɔn.nar.ri.ki	鳳あげ
50	○〕	○○〕○	○○○○〕○	ʔ'ip.pi.tur.ki	家鳩

8. おわりに

本稿では、韓国語光陽市津上面方言の音調型について、さまざまな環境の中で実現される型を体系的に整理した。その結果、この方言は、音節数の増加に関係なく、最大三種類のアクセント型の対立をもつ体系をなしていることが明らかになった。したがって、この方言は、N型(えぬけい)アクセントのサブタイプの三型アクセントである。

しかし、基本的には三型であるが、さらにこの方言は下降の遅れが起こり、言い切り形と接続形を区別する方言とそうではない方言に分けられることがわかった。

ちなみに、玉谷面方言の調査からみると、調査地点の三地点(仙柳里、新錦里、大竹里)のうち、仙柳里だけで、この現象が見られている点から、この地域でのアクセントは、「里」単位で異なる可能性が高い。

複合名詞のアクセントは、前部要素のアクセント核が全体のアクセント核として保存される「前部要素決定型」を基本ルールとしている。

光陽市津上面蟾居里、光陽市玉谷面仙柳里と、光陽市多鴨面と接している求礼郡良田面方言では、①型において下降の遅れが起こったことがわかった。その結果、三音節語以上になると①型(頭高型)がなくなる体系になっている。①型(頭高型)が実現される場合があっても、

容易に㉠型に変わってしまい、話者は意識していない。このような変化の過程にあるため、当方言のアクセントは他の慶尚道方言の三型アクセントには見られない音声レベルでの不安定な様相を呈していると解される。

参考文献

- 김차균·강홍구(2009) 「광양시 진상방언의 성조형과 음조형」『한글』285, 한글학회, pp.5-70.
福井玲(1998a) 「전남 광양시 방언의 액센트 체계와 그 지리적 분포에 대하여」『국어학』3, 국어학회, pp.271-293.
福井玲(1998b) 「全羅南道光陽市津上面의アクセント」『アジア・アフリカ文法研究』27, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.75-113.
孫在賢(2007) 『韓國語諸方言アクセントの記述研究』東京大学人文社会系研究科・文学部基礎文化研究専攻言語学専門分野博士論文, pp.3-26.
孫在賢(2010) 「韓國語大邱方言의アクセント」『東京大学言語学論集』29, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室, pp.249-267.

付記

本研究は、聞き取りに基づく現地調査報告で2011年8月、2012年4月に次の話者の協力で行った。ご協力くださった話者の方に心から御礼を申し上げる。

崔敬植氏(1956年生) 光陽市津上面蟾居里

성 명(한 글) : 손 재 현

(한 자) : 孫 在 賢

(영 문) : Son, Jae-Hyun

논문영어제목 : Accent in the Gwangyang Dialect of Korean

소 속 : 덕성여자대학교 일어일문학과 교수

E-mail : jhson@duksung.ac.kr

투 고 일 : 2014년 1월 10일

심사개시일 : 2014년 1월 13일

심사완료일 : 2014년 2월 4일